
豆崎はのんと全校超礼

墨風 澄春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

豆崎はのんと全校超礼

【Nコード】

N3751I

【作者名】

墨風 澄春

【あらすじ】

漫才に付き合っている暇がない方は、最後辺りだけをお読みください。

「あらすじよ！ここに作品のおおまかな流れを書くの！」 豆崎はのんは誇らしげな表情で言い放った。

「あらすじであらすじの説明をしてんじゃねえ！」 海部春賀は本気でツッコんだ。それもそのはず、この某サイトでの小説たちは大体が「あらすじは短く、簡潔に！」みたいな暗黙の了解事項を持

っているので、彼もそんな短カッコイイあらすじを目指していたというのに、あららこの説明だけですごい文字数使っちゃっておりますわ。

「この作品は、そうね……。ある日超能力に目覚めたヒロインが、へっぽこ主人公を連れて世界征服を企む魔王に戦いを挑むという、世界を巻き込んだ壮絶なファンタジーしようせ」

「何一つ本編に沿ってねえ！ まずジャンルから違う！」

「ええ〜。じゃ、ジャンル変える。ある日、事故で家族を失い、帰る家もなく街を彷徨っている主人公に超良い人なヒロインが手を差し伸べ、自分の屋敷に招待する。だけど、その屋敷は巷では幽霊屋敷と呼ばれている場所で」

「長っ！ しかもジャンルなに！？ 幽霊屋敷である必要性ある！？」

「ストーリー性がないじゃない！ そんなんじゃ読者が引き寄せられないわよ！」

「未だに本編のどこにも触れられてないんだけどな！ つうか聞いてたら主人公たる俺のポジション可哀想過ぎねえ！？」

「出ているだけで、幸せじゃない」

「当初、存在していなかったようです、俺！」

「つてえ！ もうこんなにも文字数ムダ使いしちやっただじゃないの！」

「あれえ！？ 俺の所為！？」

「もう！ こんなのおちゃつと片付けちゃっようよ！」

『この物語は、フィクションです』

以上！ あらすじ終わり！」

「もはやあらすじでもねえし……」

豆崎が去った後、取り残された海部は独り言のように、前々から考えていた本物の「あらすじ」を語っていた。

「『この世界には、二種類の人間がいる。

片方は世界に回される者、もう片方は、世界を回す者。

この区別だけで世界を見ることができたら、前者なんて御免。

人間逆撫で上等チビ高校生。もとい豆崎はのんはそう思ったのだ。

これは、そんな彼女が愉快的な野郎共と織り成す、超ドタバタ青春

コメディール的一篇……』

……。今さらだけど、俺出てきてないじゃん、これ。

……。あ、泣ってしよっぱい」

超エピソード 「海部春賀の超演説」

エピソード 「あまへはるか海部春賀の超演説」

突然だが、超能力とかって格好良いと思わないか？

ん？ 頭は大丈夫だと思う。んで、どうすか。かっくいー！ と思う？

まあ、どちらにしても、俺の場合はお前らと違う。端から目の付け所がち・が・う・の・さ。

あ、ごめんなさい。お願いだからその「ムカつくヤツがいます。どうしますか？」の質問で「1、縁を断ち切る」だけは選ばないで政治変わるよ？ あなたの一票はただの紙切れじゃない、とても重要なものなんだよ？ あ、今の俺、超格好良くなかった？ ああつ。選ばないでえ。

……ずいぶん、話が飛んでしまったな。お前らの所為だぞ。ああつ……（以下略）。

ご、ごほん。とにかく、俺が言いたいのは、超能力とかが格好良くないか、という話だ。うん、分かっているよね。そんなこと。

俺こと、海部春賀は、すっげえ格好良いと思う！

……うん。分かるよ。だからなんだ、って言わなくても分かるよ。

でもな、一つだけ勘違いしないで欲しいことがある。それは、俺が「超能力」を格好良いと言っているんじゃないことだ。じゃあ何かって？

それは、「超」の部分さ！

……あれえ。リハーサルではここ、ドワアツ！と盛り上がったのになあ。時代が俺についてこれていないのかな？ あはは、参ったね。あは。

さて、視線が俺ではなく、ステージのまだ先、明後日の方向を見ている君たちに、今日はこの「超」の魅力を淡々と、深々と、切々と、そして長々と語っていこうと思う。あ、寝たヤツは終身刑な！

「超」！ それは……。

超一章 「超越主義妖怪豆女。その名も、豆崎羽乃！」 その一

超一章 「超越主義妖怪豆女。その名も、豆崎羽乃！」 妖怪では
ありません

0

この世には、二種類の人間がいる。

片方は世界の端で回される者。

もう片方は、世界の中心に立ち、それをぐるぐる回す者。

6

本当はこれだけで区別できるほど、世の中は単純ではない。

だがもし、全ての人間がこれで区別できるのだとすれば、

回されるのなんてまっぴら、まめはねのた豆崎羽乃はそう思ったのである。

1

夏に近づいた、暖かな春の昼下がり。窓から差し込む陽光は睡魔

を連れてきて、こうなれば授業などどうでもよくなってくる。

ああ、眠い。

茜音学園、一年一組、そのクラスメイトたち全てが、同じような感想を心のうちで呟いていた。

黒板に延々とチョークを走らせる英語教師も、実は彼らと同じ思いを抱いていることだろう。そう、今すぐ言いたい。「お前らあ、今日みたいな日はなあ、日常の喧騒を忘れて、昼寝に身を任せるべきだぜ。アハ、ベイベ」、なんて言えば、楽だし生徒たちからの好感度上がるので一石二鳥なのに。他のクラスに比べ遅れている授業ペースがそれを阻む。

「…………だが彼らは気づかない。そんなくだらないこと、忘れられるぐらい、超すごいことがすぐ目の前まで迫っていることを」

「あ、さっきの、お前のナレーションだったんだ」

校舎とは運動場を挟んだ場所にあるプール、そのプールサイドにて、学園の生徒二人が何かの準備を進めていた。いや、実際に準備をしているのは片方の男子生徒だけで、もう一方の女生徒はプールサイドの上でうつ伏せになっていて、双眼鏡で鉄柵越しに校舎の中を覗いていた。そのレンズには、教室という檻に閉じ込められ、大あくびをしている生徒たちが映っている。

「ふふふ。その顔が驚きに染まるのが楽しみね……！」

「お前、それじゃただの悪役じゃねーか。よくタイトルに名前飾れたもんだな」

口の端を吊り上げ、悪党さながらの笑みを浮かべる女生徒に、男子生徒は筒のようなものを運びながら口を添える。

「……おいしょ、と。おい、豆子。準備できたぞー」

「くふふ……。」苦勞……」

「いや、そのキャラ貫かないでいいからな」

女生徒は復活した魔王のように、ゆらりと立ち上がる。そして男子生徒の元に来ると、どこから取り出したのか、よくSMで女王様役が使っていそうなメガネ(?)を掛けて、

「おいつ。ライターはどこだい!？」

「微妙にバリエーションが変わった!　ら、ライター?　ここにあらけど……」

「だめだめ!　田舎者口調にならなきゃ!」

「ヤツ　ーマンか!?　しかもその口調になったら俺の方が偉くない!?　おしおきだべえ!」

「この世には、二種類の人間がいる。片方はお姉さま。もう片方は、

下っ端」

「人間史全ての男性を見下しやがった！ おまつ、男なめんなよ！」

「はい、超点火っ」

男子生徒の絶望なんてそっちのけで、メガネを外した女生徒は、そびえ立つ筒から伸びる導火線に火をつけた。

じじじ……、と火の手が筒本体に迫っていく。

「……あ、ところでこれって何発入っているの？」

「一発だろ？ あと二発あるから、次々に発射していく感じだろ」

「それじゃだめじゃない！ 全部一気に飛ばすのよ！」

「はあ？ ナニ言ってる……っておい！」

男子生徒が止めたときにはもう遅く、女生徒は筒の傍らにあった残りの玉を全て筒の中に放り込んでしまった。

取り出そうにも、もう導火線も短くなっていて、手を突っ込んだら大変なことになるだろし、今すぐここから離れないと、爆音で耳がイカれてしまう。

そんなことを悩んでいるうちに、事の原因は「きゃーっ」と女の子らしい声を上げて走っていく。

「……っ！ ど、どうなっても知らねーからな！」

そんなセリフを吐き捨てながら、男子生徒も走り出す。

「ほらっ。こっちこっち」

女生徒に手招きされて、男子生徒はまだ水の満たされないプールの中に飛び込むようにして入る。

「ようし。超カウントダウン、行くわよ。三！ 二！」

「普通のカウントダウンじゃん！」

「うっさい！ ーっ！」

導火線が、筒本体に到達する。それを見兼ねて、女生徒は叫んだ。

「ぜろおっー！」

どおおん！

「な、なな何だ！？ ホワットオ！」

突然響いた轟音に、学園内の誰もが飛び上がった。

一年一組でも、英語教師の絶叫を始めに、次々と声上がる。

「ば、爆発!?」「外から聞こえたぞ!」「あ! 花火だあ!」「は、花火い?」「おつ。ホントだ」「さっきの音はこれの所為か!」「にしても近くねえ?」「運動場ぐらいから上がってるよねえ……つて、あれ? プールに誰がいるよ」「まだだ! あいつらがやったのか!」「うう……この生徒みただけど、さすがに遠くて詳しくは見えない……」

先ほどまでのおとなしさが嘘のように、一気にして盛り上がるクラスに、ただただ腰を抜かしていた英語教師は、お腹から力を入れて叫ぶ。

「だ、だだ、誰だねえ! こんなことをする生徒はあ! ホウエア!」

「あつ、先生!」

真面目そうなメガネ女生徒が、手を上げる。

「言い忘れていましたが、授業が始まった時ぐらいから、まめさき豆崎さんとあまへ海部君がいません!」

「な、なにい!?!」

メガネ女生徒の発言に、クラス中がさらに沸く。

「おおお! 豆崎と海部か!」「なかなかやってくれるね、あの二人!」「うひょーっ! 豆崎最高!」「ちよ、なにアンタ興奮して

んの!?」「お前知らねえの? 今やファンクラブができるほど、豆崎羽乃は茜音のアイドルなんだぞ!」「し、知らなかったわ」「まあ、ファンクラブのメンバー俺一人だから、知らなくても当然か。ごふう!」「アンタがただのストーカーだってことは今知ったわ……!」「ちょ、暴力反対! あ、ぎゃあああ……」

どんどんテンションが上がっていく生徒たち。それを眺めながら、未だ教壇に尻餅をついている英語教師は、ただただ啞然としていた。

「豆崎羽乃と海部春賀だとう……。マイガツ」

「ひゅー! やったわ春賀! 超成功、超盛況だわ!」

「まあ、これだけやれば盛り上がるだろな」

豆崎羽乃はプールサイドに仁王立ちして、とても嬉しそうに双眼鏡を覗いている。

だが、生徒たちの盛況ぶりをいつまでも眺めている余裕はない。

「おい、豆子。とんずらすっぞ。口うるさい教師たちが来る前に」

「……あ、うん。ねえ、春賀」

「あ? 何だよ」

豆崎は筒の前にしゃがみ込み、不思議そうにそれを眺めている。
「なんかあんのか？」と海部が隣に並ぶと、彼女は筒を指差して言った。

「これ、二発しか飛ばなかったんだけど。ちゃんと三発いれたのに」

「…………え？」

数秒考えて、海部は一瞬にして理解した。

「っつ！ ヤバい！」

「え？ 何が？ つて、ちょ、何よ！？」

海部は豆崎の手を強引に引いて走り出した。

いかん。非常にいかんぞ、これは。この展開、マズい。三発入れた花火が二発しか飛ばなかった？ 一発消えた？ そんなはずはない。ならば。

「中に不発弾が残ってたんだよお！」

「え、え ……！？」

今爆発しませんように！ と願う海部の思いは空しく、

爆音を立てて、
昼下がりのプールに大輪の花が咲いた。

超一章 「超越主義妖怪豆女。その名も、豆崎羽乃！」 その二

2

「だ、か、ら！ パイロテクニクスなんですって！ ウィルオーウ
イスブなんですって！」

「あ、翻訳。S o p p y r o t e c h n i c s a n d w i l l
o t h e w i s p 的な？」

「海部、英語教師を馬鹿にしてないか？ アングリイ。というかな
んでお前はアフロなんだ。それに焦げ臭い」

「馬鹿にしてません！ いたって超真面目です、先生！」

「豆崎は勢い良く机を叩き、立ち上がる。狭い室内に、透き通った
彼女の声は良く響く。英語教師はそれをまあまあと宥めて彼女を座
らせる。」

「豆崎は生徒指導室、初めてだから落ち着かないのかな？ 先生も
その気持ちよく分かるぞー。ミイトウ」

冷や汗を浮かべながら作り笑いを浮かべる教師に、豆崎は不快そ
うな顔を崩さない。そのつぶらな瞳で、相手を必死に睨んでいる。
迫力はまるで皆無だが。

このままでは空気が止まってしまうので、海部は口を開いた。

「まあ、今回は豆子に免じて、許してあげましょうよ。せーんせ」

「豆崎の何に免じるといふんだ。ホワット」

「可愛さっ？」

「……。やめる。なんと反応すればよいか迷う。ディフカルトウ」

「いやん。えっちい」

「……。だから」

「いやん。えっちいー」

「豆崎まで乗つかるのはやめなさい！ ドオント！」

体をくねくねさせ始める目の前の二人に、教師はごほん、と咳払いをする。

「そ、それで、今回のこれは、本当に豆崎が自発的にやったものなのかね？ レアリティ？」

教師の質問に、豆崎は間髪いれず「はい」と答える。

「その、強要された、とかではないのかね？」

「先生。それ、あたしが春賀にやらさせられたって言いたいんですか？」

「っ……。そ、そうじゃない」

嘘つけ。明らかにさっきの「凶星です」の表現だったじゃねーか。と目で訴える海部の視線を横目に、教師はまた咳払いをして、

「怪我人も出ていないことだし、それでも学園の全体的な授業妨害になったわけだが、今後こういった騒動を起こさないというのなら、学長は「今回は許す」と仰られている。いいな!？」

まあ、ここに約一名、金色の短髪が真っ黒アフロに変わってしまった少年がいるのだが。

「ふーい」

「ふーい」

「くっ……。ま、まあ、いいだろう。……そうだ、豆崎」

「なんですか」

返事の後すぐさま立ち上がり、さっさとこの場を去ろうと扉に手を掛けた豆崎は、教師の顔も見ずに返事をする。

「その、なんだ。私なんかには君のようなすごい人の気持ちなんて分からないが、な。でも、たくさんの期待によるプレッシャーで、全てを投げ出したくなることもあると思うんだ。そしてハメを外してみたくなくなったりするかもしれない。だがな、その、そういう時は私に相談してみてくれないか？」

先に指導室から出ていた海部は、その言葉を聞いてうえっ、ととてつもなく嫌そうな顔をしている。扉の先でそれを見据えながら、

豆崎は何も言わずに部屋を出た。

「お、おい、まめさ」

教師が声を掛けようとするが、豆崎は扉を勢いよく閉めることでそれを拒絶する。

ひゅー、という海部の口笛をスルーして、豆崎はわざと足音を立てて廊下を歩き始めた。

「なんだ、怒ってんのか？」

「怒ってない……っ！」

隣を歩く海部が豆崎の顔を覗き込む。そこには「怒っています。もうぶんすかぶんぶんです！」と言った具合に口をへの字に曲げた、辞書で「怒る」を引いたときに図解でついてきそうな顔があった。

心なしか、赤いオーラが見えなくもない。

（あれえ！？ めっちゃくちゃ怒ってますよ！）

海部はそうツッコみたかったが、触らぬ神には祟りなし、八つ当たりされたくないの、無言で彼女についていくことにした。

しばらく歩いていて、急に豆崎の足が止まった。

二歩手前で停止した海部が「どうした？」と聞く暇もなく、彼女は海部の目を見つめながら言った。

「春賀、あたし、おかしい？」

「は……。なんだよ、いきなり」

「あのことに気づいた時から、あたしは変わろうとした。あたし自身はそれが悪いことだと思ってない。でも、周りから見たら、あたし、酷く変なのかな」

普段の彼女のキャラにしては珍しいネガティブさに、海部はちょっと考える。

「うん。おかしいな」

「え」

「変だな。酷く」

「ええ」

「普通、という概念を軽く超越した存在だな。イコール、普通じゃない」

「……もういい、あんたに聞いたあたしが馬鹿だったわ」

「ちっちゃいくせに生意気すぎる」

「もういいって言ってるでしょ！ あと、あたしの身長に口出しするたあい度胸ね……！」

「ここではあえて数字は言わないでおくが、百七十センチの俺より二十センチ小さい」

「割れてるじゃない！ 小学二年生でも分かつちゃう計算じゃない、それ！」

とにかく無表情で自分の欠点をずらずら並べていく海部に、豆崎はがっくりとうなだれる。読者に身長を知られてしまったことがシヨックらしい。ミステリーな女でいたかったのだろうか。

だが、姿勢は俯いてはいるものの、今の彼女にさっきまでの暗い雰囲気は漂っていない。

「全く……。もう。あーあ、あんたと話したら、超真面目に考えてたこつちがアホみたいに思えてきたわ」

「今さら自覚かよ」

「……！？ い、言うわね……」

とにかく！ と顔を上げた豆崎は、勝ち誇ったような笑みを浮かべて、海部を見た。

「『超花火の狼煙』 作戦は成功したわ！ 来たる『全校超礼』に向

けて、準備を進めるわよ！」

放課後の廊下に、それは響き渡った。

その声の迫力に気圧されそうになりつつも、海部も豆崎と同じような笑顔で彼女を見据える。

「はっ。それこそ今さらだぜ。端からその覚悟でお前についてきてんだっつの」

その言葉に、豆崎は心底嬉しそうに「そう！」「と答えると、自分の教室を目指して歩き出した。

その背中を眺めながら、海部も彼女の後ろをついていく。

そう。俺らの「超」は、これから始まる。

超二章 「豆崎羽乃と海部春賀」 その一

1

あれは、桜が空を舞う日のこと。私立茜音学園に入学して一週間。今日も海部春賀は学校の屋上にいた。

「あつ！ 海部君、またタバコ吸ってる！」

「ああ？ 俺がタバコ吸おうとお前には関係ねえだろ」

第一印象、豆崎羽乃は、うるさいやつだった。

「それは違います！ タバコにはニコチンやタールなど、体に害を及ぼす成分がたっぷり含まれていて……」

「ふん。俺の体がどうなろうと知ったこっちゃね」

「つまり校則違反なんです！」

「あれえ！ 別に心配されてなかった！ つうかそういう理由で禁止されてるんじゃないと思う！」

「とにかくも！ 学校とは一つの社会であり！ 規則とは生きていく上でちゃんと守っていかないといけないものなんですよ！」

次に、めちやくちや真面目なやつだった。

「はっ！ 規則とか守ってられっかよ！」

「む〜！ それでは将来困りますよ！」

最後に、うざったいやつだった。

「それは没収です！ てい！ うつつ、そんな高いところに持つなんて反則です！」

「うつつせえ。悔しかったらその豆みたいな身長伸ばしてみる」

ついでに小さかった。

「ぬぬぬ！ し、身長は関係な……ぎゃあ！ や、やめてください！ タバコの煙をあたしに吐かないでください！」

「お前ちっちゃいくせに生意気なんだよ。ぷはあ、ぷはあ〜」

「ぎよええっ！ ふ、副流煙があ！ けほっ、けほ」

海部から何かのブレスのように吐き出される白煙に、ついに咽てしまった豆崎は地に崩れ落ちる。

「ぐぐぐ……。なかなかしぶといですね」

「お前がな」

しみる目をこすりながら、豆崎はよろよろと起き上がる。その姿

を見ると、なんだか小さい子供をいじめているように思えて、海部は少しだけ罪悪感を覚えてしまう。こんなのが同級生で、さらにはクラスメイトで、はたまた学級委員長だとは、到底信じられない。それでも、こいつは海部と同じ学校の制服に身を包んだ、れっきとした高校生なのだ。

「つかなんでお前は俺にまわりつくわけ？ 俺に好意でも寄せてるわけ？」

「学級委員長だからです！」

「あっさり言い切ったねえ。なんでだろうね。別に好かれて欲しいわけじゃないのに、なんで心が傷つくんだだろうね。スルーされたからだよな」

「好意は寄せて、いま、せん！」

「いや、溜めて言わなくていいよ」

なんか調子狂うな、と思った海部は、こいつに合わせない方向で話を進めることにする。

「んで、豆子は学級委員長の使命をまっとうして俺に注意しているわけだ」

「豆子ってなんですか！ 身長絡みですか！」

「んで、多分俺を教室に連れ戻そうと来ているわけだ」

「な、何で分かったんですか！？ テレパシー！？」

「んで、「ここで俺を連れ戻さないと、教師からの信用をなくしちゃうわけだ」

「ぬぐつ。……。……。……。そうではありません!」

「図星、ということを進める」

「ちが、ちが、ち……。ちがいま……。しゅっ……。」

「……。目的はどうであれ、俺を連れ戻しに来たんだろ?」

「そうです! 海部君にはちゃんと授業を受けてもらって、立派な大人になってもらうのです!」

「うわあ、「自分、今、すげえ良いこと言った」て顔してやがる。海部は嫌悪感でお腹いっぱいである。」

「……。あのさ」

「んん? なんですか?」

「お前、そんなに将来が大事なわけ?」

「? 変なこと聞きますね。大事に決まってるじゃないですか!」

「あっそ」

頭の上に疑問符をぴよんぴよん飛ばしている豆崎を無視して、海部は校舎の中へと歩き出した。

「あれ？ 海部君、どこ行くんですか？」

「教室だよ」

「ええ！ なんですですか！？」

「……お前、本当は連れ戻す気なかったろ。まあいいや。俺が教室行かないと、お前、困るんだろ？」

「ど、どうしたんですか。突然。頭打ったんですか？ あ、もしかタバコの毒素が……っ！」

「……。でも、教室には戻るが、授業をまともに受ける気はさらさらねえからな」

「ええ！？ じゃあ何のために戻るんですか！？」

「お前が頭打ったんじゃない！？ さっき言ったろ！」

あ、ついにツッコんでしまった。

「……？ …………………。……ああ！」

「どんだけ思い出さかのぼってんの！？ 三点リーダーどんだけ使ってたんだこら！」

「海部君、いい人ですね！ 見直しました！」

「……っ！ ぷ、ぷはあ！」

「ぎゃあ！ なんですか！ なんでタバコの煙を吹きかけるんですか！」

「うるせえ！ お前みたいなやつにはこうだ！ ぽっ！」

「きよええ！ 煙が、わ、わっかになって来たあ！」

階段を降りながら、ぎゃあぎゃあ騒ぐ二人。

この時はまだ、豆崎羽乃は海部の大嫌いな人間だった。

超二章 「豆崎羽乃と海部春賀」 その二

2

「おお、さすが豆崎！ 学校一の問題児を連れ戻すなんて、すごいことを成し遂げたものだ！ グレエエト！」

「て、てへへ。そうでもありませんよ」

ピキ、と海部のこめかみから鈍い音がしたのは気のせいだろうか。

一年一組、そのクラスメイトの誰もが、豆崎を拍手で称えている。まるで、魔王を討ち取って帰還した勇者のようだ。

学園内ではトップを争えるのではないか、と思える彼女の顔立ちは頬が緩んでいて、それが見る者を癒している。

「豆崎は優秀だな。成績優秀！ 容姿端麗！ スポーツもそこそこのでできるらしいから、もう完璧じゃないか！ いやあ、将来が楽しみだなあ」

担任でもない英語教師は、まるで娘を褒める父親のように、デレデレしながら彼女の頭を撫でている。対する豆崎も、「えへへ」と幸せそうな表情で、頭を撫でられる感覚を堪能している。

さて、自分が自発的に来たのに、それを豆崎に手柄として処理された海部はと言うと、そんな彼らの幸せなやり取りなど無視して、教室の隅にある自分の席を目指して歩く。

「はは。海部、穴があつたら入りたい状況だろ？」

「うっせえ」

「いいなあ、豆崎にあんなに構ってもらえて、お前、幸せ者だよ」

「んなわけあるか」

席につくまでに、一部のクラスメイトたちと会話を交わした。彼はこういうナリでも、学校での人間関係に問題はない。というか、自分は相槌を打つだけで、物好きな人間が彼に話しかけてくるだけなのだけど。

その後しばらく豆崎と教師の会話が続き、授業が再開した。海部はイヤホンを耳に当てて、春風が運ぶ睡魔に身を任せた。

3

豆崎羽乃は、なぜか放課後の帰り道も付きまどってきた。

「先生に海部君の見張りを任せましたから」

という理由かららしい。

うざったい感バリバリだったが、帰り道を共にするというのは海部でも我慢はできた。だが、そう、だが、だ。

「……んで、なんでお前は人の家まで踏み込んでくるのかなあ……!？」

「わああ。海部君、顔が仁王様みたいになってますよ」

「おう分かった。自重してないんだろ。ならば誰の所為でこうなったかを俺はお前に教えねばならんよなあ！」

怒りパラメータが臨界点をぶつちぎった海部が、目の前にちよこんと座っていやがる小豆一粒に神の鉄槌を下すべく立ち上がる。

が、次の瞬間、彼の体はサイドに吹っ飛び、豆崎から見て右側の壁に突き刺さった。

そして、豆崎から見て左側からとても美人なお姉さまが現れた。

「やーねー、ウチの弟ってばすぐ暴力に走って。なんでもかんでも暴力で解決しようってのはダメよねえ。はのんちゃん、麦茶でよかつた?」

そう言って、海部春賀の姉、海部詩紀は丸テーブルに湯飲みを並べていく。遠くから「てめえが暴力で解決してんじゃねえかクソ姉……」と海部弟の声が聞こえたが、海部姉は全く気にしていないようだ。

豆崎の左前に座り、湯飲みを少しすすって、「にしてもねえ」と海部姉は豆崎の顔を覗き込む。

「こづいうタイプの可愛い子を春賀が連れてくるなんて、驚きねえ」
「こづいうタイプ……ですか？」

「うん。春賀はどっちかっつーと年上好きだからね。ウチみたいな感じのが家に連れてくること多かったの」

「へ、へえ」

「あつ！ でも大丈夫よ！ 今なら春賀、そっちの女いないから、二股してる可能性ないからね！ 安心して、はのんちゃん！」

「は、はあ」

「おい、勝手に話進めてんじゃねーよ、クソ姉貴。あとそいつ、彼女でもなんでもねーし」

海部弟が横から突っ込んでくると、海部姉は「あらあらー。照れちゃってー」とか言ってその場から席を外した。

「では、あとは若い者に任せて……。年寄りは退散するといたしませう」

「なんかいろいろツッコみどころ満載なんだけどー！」

海部弟の叫びも聞かずに、海部姉はさっさと部屋から出て行ってしまった。

海部が深くため息をついていると、「……お、面白いお姉さんで

すね」と豆崎が口を開く。

「面白いわけねーだろ。欲しかったらくれてやるよ、あんな姉貴」

「ダメですよ！ 家族はかけがえのない存在なんですから！」

海部が見ると、やはり豆崎は「自分、今、すごい良いこと言った」という顔をしていた。

「はあ。つか豆子はなんで俺んちの中までついてきたわけ？」

「流れ……です」

「なかった！ そんな」ここまで来たことだし、お茶していかない？」的な流れ、なかった！」

「うう！ あ、海部君を再教育するためです！」

「てめえみてえなチビツ子に教育なんざされたかねえ！」

「ふ、ふん！ 言いますね！ 今日屋上から教室まで連れ戻された分際で！」

「恩を仇で返しやがった！ ていうかお前の脳みそってどういう作りしてるわけ!?!」

「海部君よりは優秀です！」

「ネジはいくらかブツ飛んでるけどね！」

「飛んでません！ むしろ有り余るぐらいです、ネジ！」

「もしかしてネジでできてんじゃない？」

「悪いですか！？」

「サイボーグだった！」

「ぜえ、ぜえ。息切れしながら、海部は畳に崩れ落ちる。ヤバい。こいつとまともに話してたら、話が全く進まねえ。」

仕方なく、海部は例の通りあの法則で会話を展開していくことにする。

「……でえ、つまり豆子は俺になにかしらの教育をするつもりで家に来たんだな」

「そう言ってるじゃないですか。ネジ飛んでるんですか？」

「くっ……。我慢しろ、俺。んで、端的に言えばどついう教育をするつもりなんだ？ 春で日が高いからって、時間も限られてるだろ」

「そうですね……人生について教育します！」

くそ、よりによって面倒臭そうなのをチョイスしやがって……。まあいい、テキストにこいつが言うことに相槌打って聞き流していれば楽だろ。

海部がこういうことを考えてる間にも、豆崎羽乃先生の人生についての教えが語られていく。

「まず、人生は、人が生きると書いて、人生です！」

「はいはい。……って、ええ！？ そこから！？」

「どちらも音読みです！」

「分かっています！」

「総画数は、七画です！」

「だからなんですか！」

「以上です！」

「無意味な教育、ありがとうございました！」

「無意味じゃありません！ 全く、これだと海部君は将来ろくな大人になれませんよ」

「ろくでもない大人でもそれぐらい知っていると違います！」

「それに比べ、あたしを見てみなさい！ 頭脳明晰、容姿端麗、スポーツ万能！ 将来有望、という言葉がこれほど似合う人はいませんよ！」

豆崎は微かな膨らみのある胸を堂々と張って立ち上がった。

「……それ、自分で言うか」

彼女を見上げながら、海部は思った。今日、教師が言っていたことと全く同じではないか。自信を持つということは良いことだと思うが、それを他人に自慢しまくるといふのはいささかどうか……。

だが、それよりも、海部は彼女に言っておきたいことがあった。

「お前、そんなに未来のことが大事かよ」

「え……、え？」

先ほどまでとは全く違う、トーンの落ちた海部の声に、驚き顔で豆崎は彼を見る。

海部の表情は、真剣そのものだった。

「え、だって、その。将来、誰かの、社会の役に立てるような仕事について、幸せに暮らすのが、その、良い人生だと、思うから」

「豆崎は座って、おろおろと言葉を紡いだ。

「いい人生？」

海部の突き刺すような声と視線に、豆崎の体がビクッと震える。

「い、いい人生、です……っ」

「社会の役に立てる仕事？」

「そ、そう、です」

「それがお前の考える『いい』将来か」

「は、はい……」

今にも泣き出しそうな弱々しい声で、豆崎は必死に答える。それも見据えてか、海部は「そっか」と言っただけ、黙り込んだ。

部屋に沈黙が流れる。

「俺さ」

先に口を開いたのは、海部だった。

「思うんだ。今、働いているやつら。そいつらの大半が、自分がこの仕事をしないといけない、と思ってないだろうなあって」

「……そんなこと」

「代わりがいる、それを自覚してんだよ。働く、なんて自分が生きていく糧を得るだけの行動。誰も、それ以上のことなんて考えてない」

「……」

「あるか？ お前しかできない、かけがえのない仕事」

今度は、圧迫感も何もない、ただの質問だった。

それでも、豆崎は何も答えきれなかった。

俯く彼女を見て、海部は薄く微笑む。

「だからかな。俺がこんなになっちまったの。なんつうか……」「未来に絶望した」みたいな感じですか」

「それじゃダメですよ！」とか元気いっぱい怒鳴ってくるかな、と海部は予想していたが、それに反して、豆崎は俯いたまま「そう……ですか」と呟くように言ったただけだった。

その後、結局豆崎はいつまでも沈んだままで、すぐに帰っていった。

見送りをせず部屋に残り、湯飲みをすすっていた海部に、いつの間にかいた彼の姉が声を掛ける。

「いいの。あれで」

「何がだよ」

口を尖らせる弟に、姉はため息をついて、

「珍しいよね。春賀が他人に自分の考えぶつけるのって」

「うざかったからだよ」

「それでもよ」と姉は残った豆崎の湯飲みを手にとって言う。

「でも、はのんちゃん、相当ショック受けてたみたい」

「大丈夫だよ。ああいうのは、一晩寝たらすべてリセットして生きていけるやつだから」

刹那、海部の顔が引きつったのを姉は見逃さなかった。弟に悟られないよう、麦茶の水面に視線を移す。

「……春賀は、そういうのができない人間だもんね」

一瞬の沈黙。

その静寂を踏み切るように、海部は持っていた湯飲みを、ことんとテーブルに置いた。

「……そうだな」

その声は、豆崎のよりも弱々しかった。

超二章 「豆崎羽乃と海部春賀」 その三

4

その日の夜、豆崎は一人、ベッドの中で考えていた。

月明かりに照らされた部屋で、ふと時計を見てみると午前二時。ベッドについてから三時間が経つ。

その間、彼女はずっと同じことを考えていた。

『あるか？ お前しかできない、かけがえのない仕事』

あの少年の言葉が、頭の中で何度もリフレインする。それほど、彼女にとっては衝撃的な言葉だった。

豆崎は、一つ、悩んでいることがあった。

本当は、将来、どうしたらいいのか分からないのだ。

興味のあることなんて無数。だけど夢はない。一体何に、手をつけ、一生を捧げなければいけないのか、全く分からない。

それで、なんでもできるようになろうと思った。勉強もして、ス

ポーツもして、いろいろなことを経験しようと思張った。将来、何になるうと思ってもそれが実現できるように。

だから自信を持って言える。自分は将来有望な人間だ。企業、政治、芸能、どの分野にも望まれる、理想の人間だ。

ただ、望まれるだけであって、彼女は何も望んでいない。自分には希望がない。それを誰かに知られたくはない。

そして、それを覆い隠すために、無理矢理な希望を作った。

「社会の役に立てる職業に就きたい」

詳しくは決めていない。曖昧な結論だ。だが、それを他人は褒めてくれた。偉い、しっかりしてる、将来有望だと。

ならばこれでいいと決めて、今日まで生きてきたのだ。

だが、そこで彼の言葉が、自分の一番大事で一番繊細な場所に突き刺さった。

「そんなの、ないよ……っ！」

気づけば、涙が頬を伝っていた。それを拭うべきか否かも分からず、豆崎は嗚咽を漏らした。

「あたしは……、あたしは、あ……っっ」

自分の存在が、一体何のためにあるか分からないのが、すごく怖かった。

超三章 「命とお金のありがたみを知りなさい！」 その一

超三章 「命とお金のありがたみを知りなさい！」

1

「パトロンが必要よね！」

放課後の教室の隅、春賀の席の前で、机の上に立って豆崎はそう言い放った。

まあ、確かに芸術部などに当てられる部費なんてたかが知れているし、彼女の言う『全校超礼』とやらを施行するにはそれなりの資金が必要なのだろう。前触れの『超花火の狼煙』でさえ一玉一万円以上する花火を三つも使ったのだ。あの時は金が要らなかったはいえ、次回もそれで済むわけがない。だからこそそのパトロンか。

だが、しかしだ。

海部は椅子に座ったまま、豆崎を見上げて聞き返す。

「資金提供者とか求める以前に、俺らの仲間みたいなのが必要なんじゃねえの？」

海部の言ったことは正しい。なぜなら、今の彼らには明らかに人手が足りないのだ。『全校超礼』がどういうものかは知らないが、豆崎と海部の二人だけでやれるものとは到底思えない。

海部の質問に、豆崎は首を傾げながら、

「テロちゃんや佩華ちゃんがいるじゃない」

「あいつらは俺らを『芸術部』の枠組みに入れてくれただけであつて、共に行動する仲間じゃないだろ」

特に中代佩華の方は海部たちのことを好ましく思つてはいないだろう。顧問である竜串テロ先生の意思だとしても、自分をありのままに出せる唯一の場所に、他人がずかずかと踏み込んできたのだ。快く迎えてくれるわけではない。

「お前が何をしようとしているかは知らないが、俺ら二人だけで実行できるほど、チンケなものじゃないだろう？」

「当たり前よ！」

「なら、もつと仲間を集めないといけない。わかるよな」

海部の説得に「ぬぬぬ！」と唸りながらも、豆崎は「分かったわよ……」と肩を落とし、机から降りた。

そして彼女は俯いた顔を勢いよく上げると、

「で！ パトロンの話なんだけど！」

「会話戻った！ 俺の説明ムダだった！」

「……？ テロちゃんと佩華ちゃんは仲間じゃないって説明してたんじゃないの？」

「……いや、もういいや。続けて」

「？ なんで春賀が泣いてるか知らないけど……。とっにつかつく！ 私たちのパトロンを作るわ！」

「作るわ、つつてもなー。そうそう簡単にできるもんじゃないだろ。金絡みのことだし。協力しても利益でねえし」

「ふふふ。……それが、いいカモがいるのよ。ふっふっふー」

「なんでだろう。豆子が時々、小悪党に見える」

豆崎は口の端を吊り上げて、とてもヒロインとは思えない笑みを浮かべている。それに引いている海部の反応さえ楽しむように笑ってから、「それで！」と彼の机を叩いた。

「アポイントは取っておいたから、明日会うわよ！」

「おお！ なんかそれっぽい！ まじでお金持ちが相手っぽい！」

「ふん！ あたしを舐めてたら、壊死するわよ！」

「グロっ！ お前、瘡気でも纏ってんの！？」

海部が本気の勢いで豆崎から離れると、彼女は慌てた様子で、

「な、何よ！ ほ、本気にすることないじゃない！ 冗談よ！ 冗談！」

超三章 「命とお金のありがたみを知りなさい！」 その二

2

次の日の昼休み。屋上にて喫煙満喫中な海部の前に豆崎がひよこつと顔を出した。

「おう。どした」

海部の挨拶は完璧スルーで、豆崎は彼の口からタバコをぶんどり、それ地面に踏み潰して消した後、「ちよっときて」と手招きをした。

不思議そうな顔で彼女についていく海部に、豆崎は階段を降りながら話し掛ける。

「例のやつに会いに行くわよ」

「例のやつ……って。ああ、パトロン」

そ、と振り向きもせず豆崎は返事を返す。

「つつても今からどこ行くんだ？ 相手はお金持ちなんだろ？ アポイントも取ってるんなら、どつかすごい会社とか、邸宅とかにおじゃましないといけないだろ」

「その必要はないわ」

「？ どういうことだ？」

「ついてくれば分かるわよ」

いつもより素っ気無い彼女の態度にきょとんとしながらも、「お、おう」と海部は階段を降りていく。

辿り着いたのは、二年二組の教室の前だった。

「教室………？」

海部が呟くように聞くと、豆崎はまた、そ、とだけ返事をして、扉を勢いよく開け放つ。

「な、なんだ！」「一年！？」「あれ、豆崎さんじゃない？」「もう一人つて、海部春賀！？」

クラス中に動揺の声が錯綜する。豆崎はそれら全てを無視して、教室のある場所目掛けて突き進む。

立ち止まった彼女の先には、一人の青年が机に座って本を読んでいた。

金髪のショートを構えた長身の青年で、休日なんか乗馬を楽しん

でそんなお坊ちやまタイプの人間だ。

青年は豆崎の存在に気づいたように顔を上げると、本を閉じ、王子様のような笑顔を作って彼女を見る。

「やあ。豆崎さん。待っていたよ」

「連れてきました」

そう言って、豆崎は海部の手を引っ張って青年の前に突き出す。

青年は海部と目を合わせると、ニコリと笑って、

「じゃあ、ここで話すのも何だし、場所を変えようか」

「というところで、この人が『芸術部』パトロン候補！ 関谷五郎君
「よー」

屋上で、さっきまでの不機嫌はどこへ行ったのか、豆崎はそう言い放った。

「あそ」

相槌してタバコをくわえる海部に関谷は歩み寄り、彼のタバコを流れるような手つきで没収する。

「体に悪いですよ、海部春賀君」

関谷の手の中で揺れるタバコを眺めて、海部は不快な視線を彼に向ける。

すると、関谷は「失礼」とわざとらしい動作で手を振り、

「ワイルドな君には、煙草というチャームポイントが不可欠だったかな」

「……いや、大丈夫です」

犬歯を見せて笑う海部に、関谷も薄く笑う。

その険悪な雰囲気遮るように、豆崎が海部の手を引いて、海部を関谷から遠ざける。

「ちょ、ちょっと！ せっかくのパトロン候補なんだから、敵意向けちゃダメじゃない！」

「あ？ 明らかにあっちから俺に敵意向けてきてたろ」

「五郎君は紳士なのよ！ 誰かと違って！」

「ぬぐ………！ い、言ってくるじゃねえか」

「ふん！ 言われなくなければ、五郎君を見習いなさい！」

「うっせ！ つうかなんなだよ五郎って！ 確実に関谷家の末っ子だろ！」

『そ、それは多分……五郎だし』

『俺、降りる』

『わ、わわ！ ちょっと待ちなさい！』

『知るか。俺は一郎に用がある』

『あたしだってそうしたいのは山々よ……。でも、もしかしたら関谷家では末っ子の方が権力あるかもしれないじゃない』

『ふん！ 一人っ子には分からないさ。なんだかんだ言っつてな、親は長男長女に甘いんだよ才才！』

『うっ！ 実際の末っ子が言っつからこそその説得力！』

『だから俺はあいつが到底、資金提供者なんてなれないと見た』

『い、いえ！ それは違うわ！』

『なに？』

『仮に五郎君が関谷家の中では権力が一番なかったとしても、彼の家は途轍もなくお金持ちなのよ！』

『……。なるほど、一家の末っ子だとしても、そのお小遣いの量は一般家庭の長男より遙か上だということか』

豆崎はニツと笑う。

『納得してくれたわね、春賀』

まあ、関谷五郎がれっきとしたパトロン候補であることは海部も理解した。

だが、それでも、

『俺は付き合わねえ』

『何だよ!?!』

『だってあいつ嫌いだもーん』

『小学生みたいなこと言わない!』

小学生体型の豆崎が言っても全く説得力がないのだが。

『だってさ、絶対合わねえって、俺とあいつ。別に俺がいなくても話は進むだろ? 三人称小説だし』

『それは言っちゃだめ! いや、違うのよ。今回の話、春賀がいな
いといけないの』

『はあ?』

『とにかく! どうやってでも五郎君と仲良くなりなさい!』

『? それどついつ意味……』

海部が言い終える前に、「豆崎は彼の手をぐいっと引っ張って、関谷の前に突き出した。

「なっ、おい、豆子」

「では、「ゆっくりどござー!」

海部が掛ける声も空しく、豆崎はさささーっとその場から去って行ってしまった。

屋上に残された海部と関谷。

沈黙が続く中、関谷が口を開く。

「それにしても、変わりましたよね。豆崎さん」

「? ……そうっすね」

海部の相槌に、「敬語じゃなくて構いませんよ」と関谷は笑う。

「僕はね、以前から彼女に興味がありました」

「興味……?」

「ええ、興味、です。でも決して好意とか、そういう感情ではありません。単純に、彼女の存在に興味があるんです」

「どづいつことだ?」

全く意図が掴めない関谷の言動に、海部は顔をしかめる。それを

汲み取ったように、関谷は真剣な表情を浮かべて、

「成績優秀、容姿端麗、スポーツもそこそこ、そして、将来有望と学園中から謳われる彼女が、一体どのような未来を思い描いているのか。その部分を知りたいと思っていました」

「なるほど……」

確かにそう言われれば、あの時の豆崎が描く夢がどういうものなのか、興味が湧かないでもない、と海部は思った。だが、彼は知っている。本当の話、豆崎は。

「ですが、実際のところ彼女には希望が無かった」

関谷の言葉に、海部は目を見開く。そのことを知っているのは、豆崎に打ち明けられた自分しかないと思っていたからだ。

海部の反応を見据えながら、関谷は続ける。

「この事実には驚愕しました。まさか、彼女が「将来の夢が無いから、とりあえず何にでもなれるように努力しておこう」とか考えるくだらない人間の類だったとは予想もしなかったもので」

関谷の意見は、恐ろしいほど豆崎の核心を突いている。

関谷は一つ息をついた後、海部の目を見つめながら、

「ですが、そこで僕にまた新しい興味が生まれました」

「……それは？」

「そんな豆崎さんに、衝撃を与える人物が現れたんです。……そう、海部春賀君、君です」

「？ 俺が、豆子に何をした」

海部の疑問に、関谷は不意を突かれたように驚く。

「まさか、自覚が無いんですか……？ あなたという存在が、豆崎さんの人生を一変させたんですよ」

「はあ？ 俺が豆子を？」

「驚きましたね……。まさか本人も気づいていないなんて」

関谷は意味が分からない、といった顔をしているが、それ以上に海部の方が頭の中に疑問符がいつぱいだった。

自分が豆崎を変えた？ 確かに、あの日から豆崎は変わったとは思っていたが、まさかそれが自分の所為であるとは予想だにしない事実である。

海部の中で考えが錯綜する。そこで、関谷が「ともかく」と切り出した。

「そういうことで、僕の興味の対象は豆崎さん自身から、彼女を変

えた海部君、君に移ったわけです」

「……。っ！ は、はあ!？」

「誰もが憧れる学園一の秀才を変えた、誰もが恐れる学園一の不良。うん。彼が、どうやって豆崎さんを変え、どういった方向に導いていくのか、とても興味があります」

さらに予想外な展開に、海部は顎をあんぐりと開けたまま動かない。

その反応さえ楽しむかのように、関谷は「いやあ」と笑顔を浮かべる。

「そんなことを思っていたら、豆崎さんに「パトロンになってください」と声を掛けられた時はもう運命だと感じましたね」

「……」

「それですね、その時につけた条件が「海部君と二人で話をさせて欲しい」というものでしてね」

豆崎が言っていた、「今回の話、春賀がいないといけないの」と言うセリフの意味は、こういうことだったのか。

海部としては迷惑極まりない話だが、パトロンになるための条件が「自分と話をすること」ならば、つまり、

「じゃあ、今、俺と話したから、もういいんだよな。パトロンなってくれるんだよな？」

そう、豆崎と海部は関谷の「パトロンになるための条件」を満たした。ならばこの時点で彼は海部たちのパトロンだし、海部のもうこれ以上彼とはなす必要は無いと言うことだ。

「ん、まあそうだけど」

「よし、うし！ じゃ、おつかれさんしたあ！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ なんでそんな脱兎のようなスピードで僕から離れていくんだ君は！」

「何だよ、もういいじゃんか！ 俺と話したじゃんか！ 条件守ったじゃねえか！」

「いやいやいや！ まだ話は終わってないじゃないか！」

「いや、俺、次の授業の予習しないといけないんで」

「あれえ！？ 君、そんなキャラだった！？」

「はっはは。関谷氏は私めを過大評価しすぎですよ」

「なんでいきなりメガネを掛け始めるんだい！？」

ははは、と紳士のような笑顔のまま、海部が階段への扉を開けようとする、扉は勝手に開いた。

そこからひょこっ、と顔を出したのは豆崎だった。

「終わった？　ってか何で春賀、メガネ掛けるの？」

「終わったぜ終わったよ終わりました！　あとは豆子、あいつのこ
とよろしく！」

そう吐き捨て、階段を降りようとする海部だったが、そこで豆崎
に「待ちなさい！」と腕を掴まれる。

「なんだよ！　もう俺の役目は終わったろ！　はやくトイレでタバ
コ吸い……もとい教室で次の授業の予習させろ！」

「ダメよ！　これから『全校超礼』について今後のことを話し合っ
んだから！」

「はあ？　別に放課後でもいいだろ、そんなの」

「放課後は五郎君が忙しくて来れないからできないわ！」

「なんであいつが来ないとできないん……」

そこで、海部はあることを一瞬にして悟った。

「全く、なんなんだい？」

海部を追いかけてきた関谷が、豆崎の隣につく。

そして、豆崎の一言。

「だって、五郎君も私たちの仲間に加わるんだから、全員で話し合
いしないといけないでしょ？」

本日、一番の予想外。

ずり落ちたメガネになど気づかず、海部はただ啞然としていた。

超三章 「命とお金のありがたみを知りなさい！」 その三

3

「そして俺はなんでこんな所にいるんだろうな」

「いやいや、これも『全校朝礼』のためですよ。海部君」

「間違えた。俺はなんでこんな奴といえるんだろうな」

「いやいや、これも『全校朝礼』のためですよ。海部君」

「……はあ」

海部はがっくりとうなだれたその横で、関谷はにこにここと笑っている。

彼らがいるのは隣町の駅前だ。金曜日、つまり昨日の豆崎との会議によつて、今日ここに集合するよう呼び出された二人だが、関谷はともかく、海部は全く乗り気がないようだ。

（だって、こいつといたくねーもん……。くそっ、豆子め。早く来
いってんだよ）

新車の嫌がらせかこの野郎、と海部はベンチに沈むように身を落

とず。

「それにしても、豆崎さん。遅いですね」

「あいつ、他学区に住んでるらしいから、電車の便数が少ないんだろ」

「なるほど。そして、乗り継ぎ、という可能性も考えられますね」

「そーいうこつた」

それでも、自分で時間設定しておいて遅れるとは、一体なんなのだ。やっぱり嫌がらせなのだろうか。

駅内から漏れるBGMのリズムを取っていた海部の足が、スローなジャズでは追いつけないビートを刻み始めた時、「あ」と関谷は駅の方に声を上げた。

海部もそちらに目を向ける。そして、「はいい？」といった表情を浮かべた。

視線の先で、こちらに向かってきているのは私服姿の豆崎である。

「……で、なんでさらにテロ先生と中代がいるんだよ」

ちっちゃな女の子の両サイドには、とても見覚えのありまくるモデル体型天然教師と、常時クール無表情部活仲間が、こちらもまた私服姿で歩いてきていた。

「ん〜、なんでって言われてもね〜。私たちは羽乃ちゃんと呼ばれ

てきただけよ」

「うん……。家に待ち伏せされてた……」

そういう二人の顔は、言動に反してどこか嬉しそうな色を見せている。

「どうということなんだよ。『豆子』」

「春賀、なに言ってるの？ テロ先生と佩華ちゃんは、私達の仲間でしょ？」

どうやら、先日の発言はすごい本気だったらしい。呆れる海部に、豆崎は「それよりも」と言っ、彼を指差す。

「呼んであるの？ 案内人」

「あ、ああ、まあ、ね……」

海部は苦々しい表情で頷いた。

「案内人？」

テロ先生の言葉に、関谷と中代もきよとん、とした顔を海部と豆崎に向ける。

「あれ、言ってなかったっけ？」豆崎は彼らを見て、「今日はいろんな店を回るつもりだから、ここらの地理に詳しい人をガイドにしようと思って」

「んで、ちょうど、俺の友達が適任だったと」

海部が続けると、豆崎以外のメンバーは驚愕の表情を浮かべた。

「あ、海部君、友達いたんだ……！」

「教員にあるまじき発言っすね」

テロ先生の発言にため息を溢しつつ、海部は「それで」と切り出す。

「その友達なんだけどさ、ちょっと問題があ……」

「ちはーっす！ 春賀っちの親友、花咲叶斗と！」 「風向説基、さんじょーっう！」

突然響いた声に、芸術部メンバーはバツ！ と音源 海部の後方へと振り向く。

そこには、ちょっと対照的な男が二人いた。

花咲と名乗った片方はいわゆるギャル男というもので、頭髪が命ですぜ！ と言わんばかりの手の込んだ髪型、健康的な焼けた顔は薄く化粧が施されている。金属類を中心としたアクセサリーを見る限りで十数個つけていて、淡い色のTシャツ、ダメージの入った七分ジーンズを着用していた。

風向というもう片方はいわゆるヤンキーというもので、ラインの多い坊主スタイルの頭、一本の線ぐらいにしか見えない眉、髭を少し伸ばしているが、幼さの残る顔立ちがその大人っぽさを歪ませている。アクセサリーといえはネックレスと指輪程度で、白が基調のワイシャツとチェックのパンツ、デコレーションされたブーツといった服装だ。

「叶斗……その『春賀っち』ってのやめろ」

「いいじゃんかいいじゃんか春賀っちー。それより、おおおお！ 見ろよ説基っち！」

「言われなくても見てるぜ叶斗おお！ ぐおおおおおおおお！ 春賀てめええええ！」

豆崎、中代、テロ先生を見た二人は突如として海部に襲い掛かってきた。

「ぎゃああ！ なんだテメーら！ あだっ！ 露骨に金的攻撃すんのやめろ！」

「うつせえこの野郎こんなに可愛い子達を俺達にも紹介せずに独り占めしやがってお前のような裏切り者にはちん 雑巾絞りの刑だッ！」

「それを言うならテメーらの方が出会い多いじゃ……、つておい！ 公衆の面前で他人のベルトかちやかちや外してんじゃねえ！」

「他人じゃねえ！ 親友だッ！」

「こんな場面で活用される友情なんていらねえええ！ おい！ 豆子か関谷、プラスできればテロ先生と中代！ 見てないで助ける！」

「春賀……そうだったんだ」

「何が！？ 俺は何が一体そうだったの！？」

「……過激」

「なんで中代は頬を赤らめつつ顔を両手で隠しつつ指の隙間から覗いてんだよ！ 別に恥ずかしい部分は晒されていないんだけど！？」

「若さゆえの過ちって、誰にでもあるものなのよ」

「あんたは何を語り出してんだ聖職者！」

「でもそれで人は成長するの！ だから……わたしはあなた達を止めない！」

「こんなんで成長したら、それこそ中代の思惑通りじゃねーかあああああ！」

「僕としては、争い事はなるべく避けたいので」

「お前は根本的に使えねえ！」

結果、自分の股間でもぞもぞ動きやがる花咲と風向をゲンコツで

制裁。

「……えと、ほんの好奇心だったんです」

「違う！ 絶対理由が違った！」

「なんか今日の春賀、テンション高いわね」

「普段ノリノリなお前が控えめだからバランス保つために大声出さなきゃ読者様……もとい雰囲気を作れねーんだよ！」

「なんのことやら」

「いい！ 俺の失言をさらっと流してくれるセリフ、いい！」

涙ぐむ海部に、豆崎は呆れた表情で「それにしても」と、彼の隣でたんこぶをさする青年達を眺める。

「いかにも春賀の友達でーっす！ って感じの人選ね」

その言葉に、ギャル男花咲の目が輝いた。

「そうさお譲ちゃん！ 俺らは春賀っちの親友！ つまり君の運命的存在なのさ！ だからどうだい？ 最高にハシャげるいいお店知ってるんだけど」

「いや、意味分らないし」

「くづつっ！　これが今流行りのツンデレってやつかい！」

「明らかに下二文字は不要だろうな」

「なんだい春賀っち！　もしかしてお前もツンデレかよっ！　ひゅーっ！」

「よし。皆、こいつは会話に入れない方向で進めよう」

「ひゅーっ！　冷たいぜ！」

「さすが春賀だな！　ツンドラってのを極めてる！」

「よし。皆、こんなやつらしか呼べなくてすまなかった。じゃ、かいさん」

「ちょちょちよい待てえええ！　春賀っちー！　可愛い子ちゃんたちー！　帰らないでー！　切符買うために財布取り出さないでえー！」

「無駄足運ばせて悪かったな。帰り賃は俺が出すよ」

「だからその本当に申し訳なさそうな表情で販売機にお札摩り込まないでー！」

「うきゃー！　という叫びと共に自分にすがり付いてくる、未だに親友でいてくれる二人を鬱陶しそうに見つめながらも、さっきから口元だけは緩みまくり。友バカな海部春賀君だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3751i/>

豆崎はのんと全校超礼

2010年10月9日23時13分発行